

ミクロネシアの言語にみられる日本語の影響

—マーシャル語への借用語—

神 崎 杏 実

1. はじめに

ミクロネシア地域は30年あまり日本による委任統治を経験した地域で日本と歴史的関わりが深い地域である。多くの日本人がミクロネシア地域に移住し、日常的に関わりを持っていたことにより、現在も多くの日本語からの借用語が残っている(松本, 2010)。本研究では、ミクロネシア地域内のマーシャル諸島に焦点を当て、歴史や現地調査を踏まえ、日本語の借用語彙の使用状況、意味・音韻にみられる変化について考察する。アメリカの統治後から独立した現在までマーシャル諸島の首都マジュロでは英語の流入、使用が増え、さらに昨今では中国由来の会社等が増加したため、中国語表記も見られるようになった。そのため、首都では日本語がますます消滅していく可能性が考えられる。

2. ミクロネシア地域とマーシャル諸島

2.1. ミクロネシア地域の歴史

19世紀後半にスペイン、ドイツから支配を受けた後、日本に委任統治され、日本語教育を受ける体制が整えられた。教育環境や日本からの移民の流入による日本文化の浸透があいまって借用語が地域内に定着した。しかし、終戦後は山本(1986)によるとアメリカの信託統治によりミクロネシア地域における日本色は取り除かれ、現在は英語運用能力が島民にとって不可欠なものとなっている。今回調査したマーシャル諸島は総人口約53,000人のミクロネシア地域に属する群島である。1978年にミクロネシア連邦から脱退し自治政府を発足した後1982年にアメリカの信託統治から解放され現在に至る。

2.2. マーシャル諸島の言語

マーシャル諸島の公用語はマーシャル語と英語であるが、全員が英語を日常的に使用するわけではなく、島内の店には英語とマーシャル語の両方で表記された場面が多く見られる。首都マジュロで生活する島民は生活様式が欧米化され、時に若年層は言語面に

においてもマーシャル語と英語のコードスイッチングがみられる。一方、日本語は生活環境の変化から知らない、または知っていても使用しないことが多い。しかし、ある島民によれば諸島内の他の環礁に住む人は日本語からの借用語を日常的に使用するという。

元来文字表記がなかったマーシャル語では、現在アルファベットが主に使用されているが、英語とマーシャル語の音韻体系がかなり違うため、アルファベット表記から発音することは容易ではない（山本, 1991）。山本の挙げた以下の例にみられる表記からそのことがわかる。かなで表記すれば以下の様になる。

・Yokwe yok (ヤウエヨ (ク)) —Hello

・Ij etal nan Laura. (イジェダル (ン) ガ (ン) ローラ) —I am going to Laura.

例ではYoがヤと表記され、kはカタカナ表記には対応するものがなく、talはダルと濁音で表記され、表記から発音を明確に理解することは難しい。また、今回の参考辞書には発音とスペルを表す、a, ā, b, d, e, i, j, k, l, ʎ, m, n, ŋ, ñ, o, ɔ, ō, p, r, t, u, ū, w, yが使用されている。しかし、対象者や現地新聞をみると、記号を省略して使用されている。

3. 調査方法

3.1. 調査資料と調査方法

調査はMarshallese-English Dictionary (1976) にFrom Japanと記載された日本語借用語と思われる97語をリスト化したものを用いた。首都マジュロでこのリストを対象者に配布し、これらの語彙の使用状況について聞き取り調査を行った。分析にあたって由井(1998)の分類方法を元に、マーシャル語内の借用語に合わせ一部分類を変更し「生活用語」「食」「衛生・医療」「人物」「戦争・武器」「政治・行政」「遊び」「運動」「衣類」「交通」「抽象概念」「学校関係」「住家屋」「経済・商業」「農業・水産業」「人物評価」「動作」「感情類」「地名」「動物」「労働」の21分類で分析を行った。

3.2. 調査対象

マジュロ在住の20代～70代の6名に2015年8月18日～21日に調査した。

LJ : 25歳女性、マジュロにあるミュージアムに併設の図書館で子供向けのコンピュータークラスのコーチをしている。

LY : 35歳男性、マーシャル諸島ヤルート環礁出身で現在はマジュロで教師をしている。日本留学により日本語が堪能で、祖父は日本人。

- A : 68歳女性、美術館でディレクターをしている。幼い頃に高年層と触れ合うことが多く、歴史や借用語に関する知識が豊富である。
- MF : 69歳女性、父は日系人で現在はマジュロに住むアメリカ人と結婚しマジュロで生活しており、日常的に英語を使用する。
- LM : 71歳女性、ミクロネシア連邦チューク諸島（旧トラック諸島）出身で現在は家族とともにマジュロで生活をしている。父は日本人。
- AC : 75歳男性、ヤルート環礁出身でマジュロの高校で言語関係の仕事をしており、マーシャル語の研究をしている。戦前は同い年の日本人と過ごす。

4. 調査結果

4.1. 調査対象者の使用している語彙数

調査対象者を年齢順に並べた表1を見ると、LJ、LY、MFの3人は約40語、A、LM、ACの3人は70語以上の語彙を使用している。LJ、LYは若年層のため使用語彙数が少ないことが納得できるが、MFについては日常的に英語を多用しているため、使用語彙数が少ないと思われる。MFは日系人であり日本語も話せたため、多くの借用語を使用すると予想したが、今回の結果から生育環境よりも現在の生活様式の方が使用語彙数に影響を及ぼすことがわかった。また、ACより若いLMの方が使用語彙が多いのは日系人であること、マーシャル諸島よりも南洋庁に近かったチューク諸島（旧トラック諸島）出身であり、多くの日本語が使用される環境にいたことから説明される。

表1 対象者の使用する語彙数

性別: 対象者名(年齢)	使用語彙数(全97語)
女: LJ (25)	35語
男: LY (35)	39語
女: A (68)	73語
女: MF (69)	39語
女: LM (71)	82語
男: AC (75)	75語

4.2. 使用頻度の高い語彙

リストによる聞き取り調査で、どの借用語の使用頻度が高いのかわかった。対象者6名中5名以上が使用すると回答した語彙を使用頻度が高い語彙とし、表2にまとめた。

表2 使用頻度の高い語彙

マーシャル語	日本語(意味)	マーシャル語	日本語(意味)
Aikiu	配給	*kajji, kija	キャッチャー
Atake	畑	*kare	カレー
*bōkāro	馬鹿野郎	*kōma	釜
Bōtta	バッター	*kumi	組
*bujeeñ	風船	mojo	盲腸
*būtoñ	布団	Nibboñ	ニッポン
Iakiu	野球	nikai	二階
*jaajmi	刺身	oboñ	おぼん(トレーの意味)
*jaañke	ジャンケン	*piditte, pidikke	びりっけ
*jambo	散歩	*pirōk	ブリック(ブロック)
*jerajko	さらし粉	rakka, rōkka	落下
jiae, jiai	試合	*taikoñ	大根
*jiokra	塩辛	*taṃbaj	断髪
*Jodi	草履	taṃo	タンノウ
*joiu	醤油	*tebu	デブ
Jokko	女工	tebukro	手袋
*jormōta	猿股	*tōma	球

使用頻度の多い語は34語で、6名全員が使用する語は21語(*で表す)であった。特に「jambo(散歩)」「jodi(草履)」「jormōta(猿股)」「taṃbaj(断髪)」「tōma(球)」は日常的に使用される。また、対象者全員が使用しない、かつ聞いたことがないと回答したものは2語で「karo(家老)」「wūntoba, untoba(運動場)」であり、完全に消滅してしまった語と思われる。加えて、「abba(発破)」「jjidiñ(七輪)」の2語はAのみが使用すると答え、「bujentōma(風船玉)」「ibbuku(一服)」「jinaketa(しな〈中国〉下駄)」「jokkwi(食器)」「joto(丁度)」「jukoñki(蓄音機)」の6語はLMのみが使用すると回答した。

4.3. 高年齢層が使用する語彙

聞き取り調査で「高年齢層しか使用しない」と1人でも答えた語彙を以下にまとめた。

表3 高年層が使用する語彙

マーシャル語	日本語(意味)	マーシャル語	日本語(意味)
Ainokko	合いの子	kodia	こりゃこりゃ
*aji	箸	kokōro	心
Akaje	博士	kōmōttōŋa	こまったな
baŋpe	番兵	kude	とつくり
būroojki	風呂敷	kuju	空襲
deekto, rekoot	レコード	kurob	グローブ
deenju	練習	kuraanto	グランド
diiŋko	リンゴ	*mejiani	目じやない
jeŋŋa	サンマ	miade, miadi	見張り
jennade	銭也	ŋoñ	門
jeŋtoki	戦闘機	ŋukko	持籠
jibana	スパナ	nape	鍋
*jide	失礼	*Nibboñ	ニッポン
Jitoja	自動車	niŋbu	人夫
Jobai	商売	*nikai	二階
*jokko	女工	nōbba	菜っ葉
Joonjo	村長	nōŋaiki	生意気
Jorbañ	そろばん	obajañ	おばあちゃん
jotoiñ, jotouñ	総動員	teeŋbura, teeŋbūra	天ぶら
juñaidi	宙返り	teiñwa	電話
keeñki, keiñki	元気	tōkai	高い
kiibbu	切符	wōja, oja	お茶
*kiudi	きゅうり	wūntokai	運動会
Kikanju	機関銃		

表中の7語(*で表す)は25歳のLJも使用することから、高年層だけが使用するわけではない。LJは特別日本語との関わりがあったわけではないため、なぜこのような結果となったかわからない。この点については、より対象者を増やして調査する必要がある。

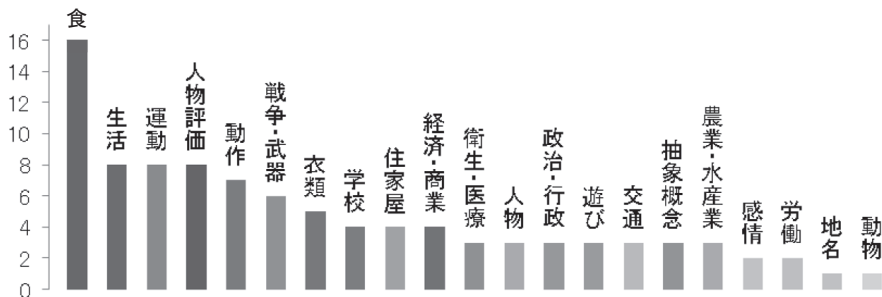
5. 分析・考察

5.1. マーシャル語にみられる借用語彙の特徴

由井(1998)によると、ミクロネシア地域のパラオ語では日本語借用語が派生語も含

め725語ある。そのことを考えるとマーシャル語の97語は少ない。しかし、杉田（1979）によるとアメリカは終戦後マーシャル群島地区を早くから基地化した一方、その他の島々はあるがままに留めたため、その他の群島には生活に身近な用語が多く残ったという。杉田はさらに、南洋庁の置かれたパラオ語には日本語が最も多く残り、続いて連合艦隊の置かれたトラック語（チューク）→ポナペ語→コシャエ語→マーシャル語の順で借用語数が減少し、一方で英語の借用は順番が逆となりアメリカの軍用基地を有したマーシャル語が最も多いという。このことを考慮すればマーシャル語に日本語起源の借用語が少ないことも納得できる。日本が委託統治していた当時は多くの借用語が存在していたはずだが、英語が公用語のひとつとなったこと、日本語教育を受けた世代が減少し日本語を話す人が減少していることが要因となり、日本語からの借用語は100語以下となったと思われる。また、マーシャル語内の借用語には音韻的变化や意味の拡大、特殊化、転移が起こった語もみられた。表4はマーシャル語内の日本語借用語を由井の分類方法（3.1.）を元に分類し、借用語が多い順にグラフにしたものである。

表4 各分類内の借用語の数



マーシャル語に残る日本語は全て名詞であった。表4を見ると食物関係が一番多く、続いて生活用語や行為・動作等の身の回りで継続して使用される語彙が多いことがわかる。また、ロング・新井（2012）によれば、借用語には既に使われていない語が使用される残存形現象がみられることがあるという。本調査でも残存形と思われる語が見られた。表5は現在日本で使用されない、又は若年層ではあまり使用されない語彙である。

表5 「残存形」現象と思われる語彙

マーシャル語	日本語(意味)	マーシャル語	日本語(意味)
Jerajko	さらし粉(漂白剤)	taɱbaj	断髪(髪を短く切る)
Karo	家老(家の長)	bampe	番兵(見張りをする人)
Jodi	草履(サンダル)	aikiu	配給
jorɱōta	猿股(男性用下着)	jennade	銭也(～銭なり)
ainokko	合いの子(ハーフの人)	jokko	女工(若い人、放浪者)
niɱbu	人夫(労働者)		

マーシャル語でも日本と同じく、「番兵」「銭也」「合いの子」「人夫」は高年層しか使っていない単語になっているが、「さらし粉」「断髪」「草履」「猿股」「女工」は使用頻度が高く、現在も広く使用されている。「草履」「断髪」は日本では使用頻度が低く、特定の服装や場面では使用されることがあってもが日常的にもはや使用されない。

5.2. 使用頻度の高い語彙

それぞれの分類内に見られる使用頻度の高い語彙の数をみると以下の通りだ。表中では使用頻度の高い語彙がなかった分類は挙げていない。

表6 各分類内の使用頻度の高い語彙数 (使用頻度の高い語彙の数/分類内の全語数)

食	7/16	衛生・医療	3/3	戦争・武器	1/6	抽象概念	1/3
運動	5/8	動作	2/7	学校	1/4	労働	1/2
衣類	4/5	住家屋	2/4	農業・水産業	1/3	地名	1/1
人物評価	3/8	遊び	2/3				

表4で食物には借用語が多いことが分かったが、表6を見ると借用語が16語と一番多い食物関係の語彙は使用頻度の高い語彙が多くあることがわかる。一方で「生活用語」「人物等」「政治・行政等」「交通関係」「経済・商業関連」「感情類」「動物」では使用頻度の高い語彙はなかった。生活用語は2番目に借用が多いため使用頻度が高い語が多いのではと考えたが、ほとんどの語が英語からの借用語を使用するようになっていた。多くの語は高年層が「昔話をする時」「年配者同士で話す時」に使用することが主であった。以下では使用頻度の高い語彙の中で特に興味深いと思うものを考察する。

<料理名>

料理名の中には以前存在しなかった物が多く借用されている(表2)。特に食品関係

語には「醤油」「塩辛」「刺身」等の元々マーシャル諸島にはなかったもので、かつ戦後に流入してきた英語にもなかった食物名や料理名がみられた。

<盲腸>

医療用語で「盲腸」だけが借用されるのは不思議である。山本（1991）によれば、借用される病気名は白人との接触により流入し始めた病が多いという。そう考えると、盲腸は日本時代に生活環境等の変化から流行し始めた可能性がある。

<二階>

一階や三階などではなく二階だけが使用頻度が高いが、LYによれば日本人が委任統治を始めてから二階建ての建物を建てるようになったという。現在のマジロ内にも二階建ての建物は国の施設や裕福な一部の家以外見られず、ほとんどが平屋である。

<散歩>

「散歩」は特に使用頻度が高く、マジロ内を散歩中も子供たちから「jambo?どこに行く?」と聞かれることが多く日常的に使用されていた。また、ジャンボタクシーというタクシー会社もあり、この借用語が深く浸透していることがわかる。

<スポーツ>

「バッター」「キャッチャー」「野球」「試合」などの日本語が英語から借用した野球用語を頻繁に使用する。英語起源の単語のため、アメリカ式の生活になった後も使用され続けていると考えられる。特に「キャッチャー」「野球」「試合」は最も若い対象差であるLJも使用するため、今後も残り続ける可能性が高い。

<草履、手袋>

調査中「jodi（草履）を履きなさい」と言う場面を見て、草履が日常的に使用されることがわかった。また、店にも jodi と表記されたサンダルが売られ、深く定着している様子だった。一方、手袋はなぜ使用され続けるのだろうか。マーシャルは1年を通して温かく手袋を日常的に使用するとは考えづらい。そこで2つの理由を考えた。

- a. 着用頻度が低いため、英語からの借用語に転換される機会が少なかった。
- b. 野球用語に既に「グローブ」が英語起源の日本語借用語としてあったため、「グ

ローブ＝野球のグローブ」「手袋＝野球以外のグローブ」として使い分けた。参考辞書では「kurob (グローブ)」は baseball glove の意、「tebukro (手袋)」は glove として記されているため、b. の理由で手袋が残っている可能性がある。しかし、「kurob」が現在あまり使用されていないことを踏まえるとこの仮説も再考の余地がある。

<人物評価語>

人物評価語では「馬鹿野郎」が興味深い。A によれば馬鹿野郎はもはや意味が何かではなく単なる表現や相槌として使用されることが多いという。馬鹿野郎は表現として今後も長く借用語として生き残るかもしれないが、タンノウが馬鹿野郎と似たような意味を持つことから、今後この2語のどちらかが使用されなくなる可能性がある。また、タンノウは英語 don't know からの借用であるという意見が多く出た。

5.3. 音声変化と表記

日本語がマーシャル語に流入した時、日本語の音でマーシャル語に対応していない音 (c[ʃ], f[Φ], g[g, ŋ], h, s[s, ʃ], z) をどのように表記したか考察する。また、発音を表す表記がマーシャル語にある場合 (p, d, y[j]) でも異なる表記が使用される例もあり、それについても考察した。実際のマーシャル語の発音については精密な分析は行っていない。

5.3.1. マーシャル語にない表記に関わる変化

① h

借用した日本語に h の音がある語彙を見ると、h が脱落している。この変化は h を持つ5語中5語全てで見られた。表7の語はいずれも元の日本語から h が脱落し、借用されたと考えられる。また、語頭だけでなく「mihari」→「miade, miadi」のように語中の h 音も脱落している。

表7 hを持つ語彙

マーシャル語	日本語
abba	happa 発破
miade, miadi	mihari 見張り

② s[s, ʃ], c[tʃ], z

s[s, ʃ], c[tʃ], z の音は j へと変換される。s, c は日本語に表記上はあるが実際の発音ではないため、括弧内に発音記号を記した。以下の表 8 の 3 語を見ると、j へと変化する様子がわかる。

表 8 s[s, ʃ], c[tʃ], z を持つ語彙

マーシャル語	日本語
jijidiñ	shichirin 七輪
joonjo	sonchoo 村長
jodi	zoori 草履

なぜ s[s, ʃ], c[tʃ], z が j へと変化するかはわからないが、s[s, ʃ] の持つ 30 語中 30 語、c[tʃ] の音を持つ 9 語中 8 語、z の音を持つ 1 語中 1 語でこの変化が見られた。例外は jatiraito (サーチライト) でルール通りならば saachiraito → jaajiraito となるはずのところ、c が j ではなく t に変化している。また、s[s, ʃ] の音は 30 語中 30 語、c[tʃ] の音は 9 語中 8 語でこの変化が見られるため、s → j, c → j という変化がルールとして起こることが考えられるが、z に関しては「jodi (草履)」の 1 語しか借用語として辞書には残っていないため z → j が規則かどうかは判断できない。

③ f [Φ]

日本語の「ふ」は本来 [Φ] の音だが、ローマ字表記となったときに f と表記されるようになったと思われる。表 9 より、f の音は b へと変化したと考えられる。f を持つ借用語

表 9 f [Φ] を持つ語彙

マーシャル語	日本語
būroojiki	furoshiki 風呂敷
būtoñ	futon 布団

は 4 語中 4 語全てで b への変化が見られた。4 語中 4 語にこの変化がある。

④ g[g, ŋ]

日本語で g[g, ŋ] の音を持つ 8 語中 7 語で g → k への変化が見られた。表 10 を見ると g が k に変化することがわかる。例外は junaidi (宙返り) で c → j への変化は見られるが chuugaeri → juukaedi となるとところが g → n へと変化している。

表 10 g[g, ŋ] を持つ語彙

マーシャル語	日本語
diiñko	ringo リンゴ
kureanto	gurando グランド

5.3.2. マーシャル語にある音に関わる変化

① p

pの音はマーシャル語にあるが10語中9語でbへの変化が見られた。表11を見ると5.3.1.で記したルールが適応され、表記が変化していることがわかる。p→bの変化の例外として bampe (番兵) があり、本来このルール通りならば bampei → bambei となるはずが p の音が変化せずそのまま表記されている。

表11 pを持つ語彙

マーシャル語	日本語
abba	happa 発破
jambo	sanpo 散歩

② d

dの音がtに変化する語彙も見られた。dを持つ13語中12語でこの変化がある。例外として sennadi (～銭也<そろばん用語>) がある。sennadi は、規則通りならば sennadi → jennnate となるが、jennade と d の音そのまま表記されている。しかし、銭也は本来のローマ字表記に直すと sennari となるため、参考辞書に誤植があり、正確には sennari → jennade の変化があった可能性がある。

表12 dを持つ語彙

マーシャル語	日本語
jitoja	jidoosha 自動車
tambaj	dampatsu 断髪

③ y[j]

日本語の y[j] の音は i に変化し、y の音を持つ 8 語中 6 語でこの変化が見られた。マーシャル語にも y の表記はあるが、日本語が [j] の発音に対して、マーシャル語では [y] と発音する。また、マーシャル語の i も [i] と発音され [j] とは発音が異なるので、なぜ y → i の変化をするかは疑問である。例外として bakayaroo (馬鹿野郎) → bōkāro と shitsurey (失礼) → jide がある。bakayaroo は ya が、shitsurey では tsu, y が欠落して借用されているため、i への変化を確認できないが、この 2 語を除く全ての y を持つ語が y → i の変化を持っていた。

表13 yを持つ語彙

マーシャル語	日本語
aikiu	haikyuu 配給
iakiu	yakyuu 野球

上記の規則以外の変化を持つ語彙もあった。しかし、変化していない語彙の方が多いため、規則ではなく発音しやすいよう変化していったものではないかと考えた。一方で

石川 (2011) によれば邦人移民のうち約70パーセントが沖縄出身者であった。それを踏まえると沖縄の言語的特徴を持って借用され定着した可能性もある。沖縄には e → i, o → u, tu, du, su, zu の母音 → i の対応がある (多和田, 2010)。加えて、Takaesu (1994) によると、うちなーやまとぐちでは d と r の交換が起こり、dippa → rippa (立派)、doosoku → roosoku (ろうそく)、karara → karada (体) となることがある (Osumi, 1998, p.134)。表14、15、16、17の語は沖縄出身者の日本語に影響された可能性がある。

表14 r → dの変化を持つ語彙

rekoodo → deekto(レコード)	chuugaeri → juñaidi(宙返り)
renshuu → deenju(練習)	kyuuri → kiudi(きゅうり)
ringo → diiñko(リンゴ)	korya → kodia(こりゃこりゃ)
sennari → jennade(銭也)	tokkuri → kude(とっくり)
shichirin → jijidiñ(七輪)	birikke → piditte, pidikke(びりっけ)
zoori → jodi(草履)	shiturey → jide(失礼)

表15 e → iの変化を持つ語彙

chuugaeri → juñaidi(宙返り)
kaaten → katiin, katiñ(カーテン)

表16 o → uの変化を持つ語彙

mokko → mukko(持籠)

表17 suの母音 → iの変化を持つ語彙

supana → jibana(スパナ)

表14、15、16の語彙は沖縄出身者となんらかの関係がある可能性がある。また、これらの変化が全ての語に現れず、一部の語彙だけに現れるのかどうかは不明である。

5.4. 意味の変化

5.4.1. 意味の拡大

表18には意味の拡大が見られた語彙を集めた。特に興味深かったのは「iakiu (野球)」と「jambo (散歩)」である。聞き取り調査によると、この2語は日常的に拡大した意味を使用することがわかった。野球は元々スポーツの名前として借用されたものが「野球をする」という動詞の意味として使用されるようになったと考える。また、散歩は以下の2点の理由を考えた。

- a. 本来の意味で借用されたが、徐々に意味が広がり旅行なども指すようになった。

b. 拡大された意味

で借用語が広がり本来の意味は後から伝わった。

a. を考えた理由はマーシャルの人々にとって目的もなく歩くという行為が存在しなかったのではと考え、だんだんと生活や環境に合う形で意味が拡大したと考え

えたからだ。また、b. の理由はマーシャル諸島は小さな島であるため、日本人とは距離の意識に違いがあり、日本人にとっては単なる散歩の短い距離でもマーシャル人にとっては長い距離であったため「散歩＝遠いところへ行く（長い距離を歩く）」とマーシャル人が解釈し使用するようになり、本当の意味が後から正確に伝わったのかもしれないと考えた。

表18 意味の拡大が見られる語彙

マーシャル語	辞書記載の意味
akaje(博士)	Expert knowledgeable, scholar, holder of doctorate
bōtta(バッター)	Bat, baseball
būtoñ(布団)	Quilt, mattress
iakiu(野球)	Baseball, play baseball
jambo(散歩)	Hike, travel on a vacation, go away for a change of scene, saunter, excursion, ramble, stroll, walk aimlessly
jitoja(自動車)	Automobile, truck, drive
jodi(草履)	Zories, wear a zori, slipper, go-ahead
kumi(組)	Group, work gang, company, team
nikai(二階)	Second floor, two-story house

5.4.2. 意味の特殊化

以下では本来の意味よりも語彙が指す意味が狭くなったものをまとめた。興味深いのは「taṃ baj(断髪)」と「tōṃa(球)」である。元々髪を切るという語彙はマーシャル語にあったはずだが、なぜ

断髪は女性の散髪として浸透しているのだろうか。日本では女性が断髪という特別な事情があったのではと思う。マーシャルの女性は長髪が多く、短髪は珍しい。そのため、髪を切ることの珍しさと断髪の意味合いが相まって女性の散髪として定着しているのではないだろうか。また、球は lightbulb の意味で使用されることが主で、球型の丸い電気を指す時だけ tōṃa を使用する。

表19 意味の特殊化が見られる語彙

マーシャル語	辞書記載の意味
jobai(商売)	Business, sell, trade, dicker, barter, peddle
kurob(グローブ)	Baseball glove
ṃoñ(門)	Gateway, usually decorated with flowers and coconut fronds
taṃ baj(断髪)	Girl's haircut, Japanese style; shingled, cut the hair short
tōṃa(球)	Sphere, lightbulb, pupil of eye

5.4.3. 意味の転移

表20では本来の意味とは異なるものを指す語彙をまとめた。特に興味深いものは「diin̄ko (リンゴ)」と「jokko (女工)」である。リンゴは聞き取り調査によると、マーシャル諸島内のエボン環礁に日本

表20 意味の転移が見られる語彙

マーシャル語	辞書記載の意味
abba(発破)	Dynamite
aikiu(配給)	Share food
diin̄ko(リンゴ)	Apple, phosphate
jeɽma(サンマ)	Canned sardines
iide(失礼)	Lose courtesy, fate, chance, by accident
iokko(女工)	Commoner, tramp, youngster
kodia(こりゃ)	Expression uttered when inebriated. "Bottoms up", hard drinking
rakka, rōkka(落下)	Drop down, parachute
taikoŋ(大根)	Pickled radish
tōkai(高い)	High, fly ball in baseball, pop-up n baseball

人が持ちこみ肥料の「リン酸」として定着した。なぜリン酸として借用されたのだろうか。リンゴを作る肥料として入り、音が似ていたため「リン酸」が「リンゴ」に変化してたのかと考えたが、マーシャル諸島はココナッツが主な生産物で、スーパー等のリンゴは輸入品だったのでこの説はないだろう。女工は元々「働きたくない人、遊んでばかりの人」を指していたが現在では「若い人」の意味で使用することがほとんどである。

6. 結論・おわりに

本調査から現在も使用頻度が高い借用語は34語で、特に食関係の語の使用頻度が高いことが明らかとなった。また、借用語の認知と使用頻度の関係には年齢だけでなく周りの環境が影響を及ぼすことが判明した。さらに、本調査では音韻変化や意味変化もあることが明らかとなった。しかし、今回の調査は高年層の調査対象者が多かったために若年層の調査結果が少なく「高年層が使用している語＝使用頻度が高い語」となった可能性がある。使用頻度の高い借用語は本調査の結果の通りなのか、幅広い世代に調査する必要がある。また、今回言及しなかった借用語の実際の発音についても調査が必要だろう。

参考文献

石川有紀 (2011) 「旧南洋群島日本人移民の生活と活動—沖縄県出身移民の事例を中心に—」『移民研究』第7号 pp.123-142 琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門

- 杉田洋 (1979) 「ミクロネシア諸語に与えた日本語の影響：予備調査報告」
『東京学芸大学紀要. 第2部門, 人文科学』第30号 pp.1-5 東京学芸大学
- 多和田眞一郎 (2010) 『沖繩音韻の歴史的研究』 溪水社
- 松本和子 (2010) 「ミクロネシアの日本語」『日本語学』第29巻 第6号 pp.58-73 明治書院
- 山本幸男 (1986) 「マーシャル語考—ミクロネシア學術視察報告Ⅱ—」『武蔵野女子大学紀要』第21号 pp.21-28 武蔵野女子大学
- 山本幸男 (1991) 「マーシャル語考Ⅱ」『武蔵野女子大学紀要』第26号 pp.107-123 武蔵野女子大学
- 由井紀久子 (1998) 「パラオ語に受容された日本語を起点とする借用語」『京都外国語大学研究論叢／京都外国語大学機関誌編集委員会』第51号 pp.310-330 京都外国語大学国際言語平和研究所
- ロング, ダニエル、新井正人 (2012) 『マリアナ諸島に残存する日本語—その中間言語的特徴—』 明治書院
- Abo, Takaji et.al. (1976). *Marshallese – English Dictionary*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- Osumi, Midori. (1998). Languages in changing societies: New Caledonia and Okinawa. *Essays and Studies*, 48-2 (pp. 125-141). Tokyo: Tokyo Woman's Christian University.
- Takaesu, Yoriko. (1994). Uchinaa-Yamatoguchi no kenkyuu. *Okinawa Gengo Kenkyuu Center Shiryou* No. 117.

Abstract

The Micronesia region is an area consisting of many small Islands, where the influences of language and culture from Japan are still strong because of the Japanese mandate there from 1920 until the end of World War II. Much research on loan words from the Japanese has been done, especially in the Palau area. This thesis examines loan words from Japanese in the language of the Marshall Islands. In recent years, the situation of loan words from Japanese has changed because of the increasing influence of American and Chinese culture. This thesis also investigates these changes.

In carrying out this survey, I made use of 97 loanwords which are listed in a Marshallese-English Dictionary (1976). I conducted fieldwork in Majuro, the capital city of the Republic of the Marshall Islands to find out whether these words are still used or not, and if they are, how frequently they are used. This paper also discusses what kind of phonological and semantic changes these loan words have undergone.

In sum, the following facts were observed.

- ・ Loan words have undergone phonetic changes in systematic ways.
- ・ Semantic expansion, specialization, metastasis of the meaning occurred in some loan

words, sometimes following a shift of part of speech.

- The loans of Japanese origin in general are used more frequently by elderly people, but sometimes the life environment also has an effect on the frequency of use.